

さらにこれが継続・発展することを望んでいた。我が国としても国際貢献の一環として、今後も継続して遺伝資源に関する共同調査・収集・研究を進めていくことが望ましいと思われた。

本調査では現地の研究者に多大の協力を得た。特に馴染みの無い作物がほとんどだったので、現地研究者の協力が不可欠であった。しかし、多くの作物の収穫期が4～5月で、必ずしも遺伝資源収集に適する時期とはいえず、また、政権交代直後のボリビアでは遺伝資源の国外持ち出しが困難で、収集も不可能であった。今後の収集活動では事前に現地と

十分な打合わせをする必要があると思われる。さらに、二ヶ国を調査するのにたった20日間は短すぎて十分な活動は不可能だと、協力してくれた現地研究員から指摘されたが、調査活動を実行してみてその忠告の意味がしみじみと理解できた。

今後の活動では一ヶ国を十二分に調査・収集するにも是非とも最低30日は必要であろう。限られた期間であったにもかかわらず、一応の成果が得られたのはエクアドルのINIAPとボリビアのIBTA-CIPの研究者に負うところが大きい。

おサルさんは「ワセシロ」が大好き

私は、上野動物園や名古屋モンキーセンターなど、日本の主な動物園に棲んでいるアビシニア・コロブスというサルです。ちょっと取っつきにくい学名ですが、アビシニアは現在のエチオピアのことです。また、末尾に何故かブスとついていますが、とんでもないことで、実は私達は世界で一番美しいサルだと自負しています。黒と、頬を中心とした白のツートン・カラーのバランスはパンダ以上でしょう。「クロシロコロブス」とも呼ばれ、オナガザルの仲間、尾は長く、体長は約60センチです。

もともとは東アフリカなどの森林の樹上に棲息し、木の葉を主体に、木の芽、果実、花なども食べていました。そんなわけで、肉食の人間に比べますと、おならの臭いも上品です。

動物園でいただく食べ物では、果物よりも、野菜、特にジャガイモが好きです。

日本の動物園に来てから、初め他の果物好きのサル同様、サツマイモを中心にもらっていましたが、北海道のジャガイモを一度もらってからは私どもだけ、そちらのほうが好きになりました。「メークイン」より、どちらかというと「男爵薯」に手が伸びていましたが、一度北海道は端野町産の「ワセシロ（ネオ男爵、伯爵）」を口にしてからはそちらが大好きになり、上野動物園の仲間では9頭で年間1.8トン食べるよ

うになりました。

飼育係が皮を剥いて品種名が判らぬように混ぜてくれても、本能的に区別できます。

生で給仕されますから、一気に食べませんが、翌日まで置けばはっきり判ります。「ワセシロ」は剥皮褐変が少ないのです。それだけでなく、蛋白質組成などからくる風味などを全身で区別できるからでしょうか。飼育係も不思議に思っています。

聞くところによると、北海道のネズミも、幾つかの品種があれば「ワセシロ」に真っ先きに手、いや歯が寄っていくそうです。しかし、魚のフナは煮崩れの少ない「農林1号」が好きで、これがため人間に釣られてしまいますと言っていました。「ワセシロ」や「キタアカリ」は煮え上るのが早く、崩れやすいから釣りの餌には向かないのでしょうか。

今後おいしい品種の選抜は、私共サルかネズミに任せたいほうがいいと思いますが、いかがでしょう。

最近、ジャガイモの品種改良で害虫の被害を軽減するため、葉中のデシミン含有の高いものの育成が進んでいますが、タバコのニコチン、トマトのトマチン同様、虫が嫌うものは私どもサルにとってどんなものになるか心配なんです。よ。（ホクレン 主任技師・浅間和夫）